
cafe **アンタッチドア**

酔和にしむり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cafeアンタツチドア

【Nコード】

N6867V

【作者名】

酔和にしむり

【あらすじ】

横浜の閑静な街並みに佇む「アンタツチドア」は、一見どこにもあるカフェに思えます。まあ、少し変わった男女が切り盛りしていますけどね（キー「ちょっと、あたしは普通ですってば！」）
ただ、悩みを抱えたお客様が来店したとき、キー・ベル・ノブ・門・マスターたちは、自身が持つ特別な力を使って、トラブルを解決するのです（ベル「中でも、ベルのが一番すごいわよう」）
それが、現世に姿を見せる、伝説・想像上の生物の仕業だとしても…
彼らはまだ知りません、これらの生物と自身の能力との関係を…

温かくて、ドタバタしていて、やっぱり温かい。人々を笑顔にする
現代ファンタジー。

第1話 コロナはどこですか（前書き）

投稿日の約1年前に執筆したもので、自身の初執筆です。
今読むと反省点が目に付きますし、まだまだ要修行ですね。
それでも、楽しんで読んで頂けたらと思います。

第1話 コロナはどこですか

右上、左上、左下、右下
20歩進んで

右上、左上、左下、右下

さらに20歩進んで

右上、左上、左下、右下

その後、後ろを振り返って、広尾大樹は思わず苦笑いした。

苦笑いの後には残念な気持ちが入み上がる、この習慣は今も意味が無い。後方はさつき見た道路と、さつき見た建物。

気持ちを切り替え、先程までの作業を再開することにする。

右上、左上、左下、右下

しかし再開後7回目のループで作業を中断した。左下に視線を向けたとき、華麗な書体を発見した為である。

「cafe アンタッチドア」

この書体があった看板をアクセサリにしている建物は、新しくも豪華でもないが、落ち着きと心地良さがある。

その建物から、微かにコーヒーと木の香り。香りも建物と同様に心地良さのあるものだった。

「木の香りか……」

そう呟き店の方へ歩みを変える。これによりループが終了すればこの上ない幸福だが、広尾はそこまで期待はしていなかった。

右手1本で扉を開けた瞬間、開放されたコーヒーと木の香りが周囲を包む。店内はそれほど大きくない。右に木製のカウンター、左には3台の木製テーブル。いずれも四半世紀程度の年代を感じるがとても手入れが届いている。

中央の奥には等身大の人形が佇んでいる。華奢な老人がタキシードを着た姿だ。広尾にはこの人形の仕事が「リムジンから出てくる有名女優が歩く赤絨毯を敷く」以外に想像できない。

しかしその人形が「いらっしやいませ」と発したので、彼は予想と妄想から脱却し人形を人間に訂正した。

正直、この手の空間に足を運んだことは滅多にない。勝手にわからないまま、扉に最も近く元・人形から最も遠いカウンター右端の椅子に腰掛けた。

カウンターに煙草とライターを置き、老人に話しかけようと身体を左に向ける。しかし場の雰囲気に見事に合致した老人と、浮いていると感じた自分自身とに共通点が見出せず、思わず言葉を飲み込んだ。

間を置いて仕切り直そうと一度カウンターに正対すると、目の前には今しがた置いた煙草、ライター、そしてデザート。

突然出現したデザート？

その右には、微笑んでいる人物が佇む。魔法の主だろうか。

「あーらあら！ お疲れの様子よ、ミスター生真面目」

魔法使いは外見・服装・立ち振る舞い、全てが派手だったので、そのよく通る澄んだ声は意外性があった。

「あの、僕はまだ何も頼んで……」

目に見えて戸惑っている広尾と、遠慮のない魔法使い。

「疲れたときの特効薬知ってる？ 第2位は甘いもの、そして第1位は……」

「ベルの笑顔よっ！」

その第1位の笑顔でベルはメニューを差し出す、名前はベルというのか。

【MENU】

ベルの気まぐれスイーツ 時価
ベルのスマイル ¥0

メニューは見るまでもない。既にこのカフェの全メニューが揃ったのだから。

「今日の作品は林檎のタルト、アレンジド BYベルよ。副題はね、えーと、えーと『セピア色の……渚の……』」

「もうベル！ 順序が逆でしょ」

ベルではない女性が、水とメニューを持って近付いてきた。どうやら彼女が持つメニューが本物のようだ。いや、商品が実在しているのでベルのメニューも誤りではないのだが。

広尾はメニューに目をやると同時に、胸のネームプレートを一瞥する。ベルをたしなめた女性の名前は「キー」

「勝手なことをして申し訳ありませんお客様、お代は結構ですから。あと、苦手な食べ物ではありませんか？」

キーは非常に丁寧に、柔らかい物腰で言った。ベルの後なので、よりウエイトレス然として見える。

「苦手なものでもベルの手にかかれば、林檎だって、赤レンガだって、どんな物でも食べられますからね。そそ、お代は結構よ！ 今は『いい男サービスタイム』なの！」

「いえ、僕は林檎は好きです。あ、あの、コーヒーを頂けますか」

「かしこまりました、ごゆっくりどうぞ」

やはりウエイトレス然としているキー。

「ごゆっくりどうぞ。泊っていてもいいわよ」

やはりウエイトレス然としないベル。

キーは広尾の煙草とライターを左へ動かす

「せっかくですからタルト、アレンジド以下略を頂いてくださいね、前を失礼します」

そして以下略のタルトを広尾の目の前に置き直した。ライターを

右に置かなかったのは、間もなく来るコーヒーを右に置くためである。

「タルトには惚れ薬が入っております。なんてね。入っていないけど食べたらベルを大好きになるわよ。」

広尾はベルの言葉に甘えて（ベル「スイーツだけに『甘えて』ね」）タルトの先端をフォークで切り取り口へ運ぶ。

「ああ、とても美味しいです、林檎の甘さがとてもよく出ています」「アポー」

褒められて感激なのか、照れなのか、林檎なのか、小難しい返しをするベル。

「コロナにも、食べさせてあげたい」

「アポー！ ハニーちゃんがいたのね、残念無念。それでもケーキはタダよ、ああ心の広いベル！」

「いや、コロナというのは猫なんです。僕の飼っている」

広尾は生真面目に返す。

「ニャンですと！ キヤツ キヤツ キヤツですと！」

驚いたのか、ご機嫌なのか、猫なのか……

キーはベルと絡むのを諦め、広尾の方を向いて微笑みながら言った。

「そのコロナが、店内にいると思ったのですね、広尾さん？」

「どうしてわかったのですか？ その通りです！ しかも、僕の名前まで！」

予想通り驚いた広尾にベルは嬉しそうに話す。

「キーはね、何でも知ってるの。当然ベルの正体もね（それは追い追いよ）ってことはニャンちゃんが行方不明なのね」

「はい、昨日の昼からずっと」

広尾はずっとコロナを探していたのだ。

「コロナさんは残念ながら居りませんが、コーヒーはあなたを待っておりますよ」

紳士的な台詞を従えて右手側に突然出現したコーヒー。その横で

長身でスリムな男性が微笑んでいる。ケーキの回を役者を替えて再現したようだ。もつとも今回は話に夢中で気付かなかっただけだが、「お客様のご注文にお応えしてコーヒーを用意致しましたが、私の専門は夜でございます。ぜひ一度お越しくださいませ」

「ノブ、下ネタ？ キャーッ！」

「フフフ、とんでもございませんベルさん。下ネタですよ」

呆れるのも面倒なので、キーが真顔で紹介する。

「こちらはバーテンダーのノブ、夜っていうのはバーの意味よ」

「ベルさんが定義付けするのも納得です。お客様は、いい男ですね」
外見だけで言えばノブの方が遙かにいい男だ、と思いながら広尾はコーヒーを口にした。

「そうだ、どうして僕の名前とコロナのことがわかったんですか」
待ってましたとばかりにキーは説明する。

「ライターに触れたときです、コロナを心配する広尾さんが見えましたが」

「きゃあああ！ サイコホラーよう！」はしゃぐベル。

「サイコメトリーですね、あたしの能力なんです」

広尾は動揺するとライターを弄る癖があることを自覚している。

確かに、コロナがいなくなったときはライターをよく触っていた。

「はい。いなくなったのはこの近辺を歩いてきたときです。いつものようにコロナは僕の後を付いてきてたのですが、振り向いたら突然いなくなっていました。こんなの……初めての事です。コロナは木製のテーブルの上にもいつもいるので、木の香りのするここにいるのではないかと思って」

優しく温かく柔らかい表情でキーは広尾を見る。

「広尾さん、とてもコロナを大事にされてるんですね」

すると広尾の左腕に傷跡があるのに気付いた。そういえば彼はドアを開けると、タルトを食べるとき、いずれも右手しか使っていない。

「左腕……失礼しますね」

そつと傷に触れる。

「あらあら物だけじゃないのね、そんなこともできちゃうのね。キ―選手、4ポイントアップ」

キ―には見えた。広尾の左腕の傷は車からコロナを守って負ったものだ。今や指先を自由に動かすことはままならない状態である。

「ベル、ノブ。あなたたち人を見る目ある！ 広尾さんはいい方です」

キ―はそう言った瞬間、意思のスイッチを「強」に切り替えたよ
うだ、それが表情にも表れる。

「おお！」

「よっ」

ノブとベルはそれを察し、何かを期待している。

キ―は広尾の前に人指し指を突き出し、腕を右に90度捻ると

「lock the request in solid-doo
r！」

「きゃあ！」

嬉々とするベル。

「これはこれは」

微笑むノブ。

そして無表情の店長。

広尾は状況を掴めない。

「それは……どういう意味でしょうか？」

「ベル達が見つけてあげるって意味よ」

「え！ コロナを探してくれるのですか」

「探すんじゃないの、見つけるの。ベル達に不可能は無いんだから」

「ではでは作戦開始よ！ その名も『コロナちゃん大捜査線 ベイブリッジを……』」

「広尾さん、コロナの特徴を教えてください。外見ではなくて、クセや習慣になっっていること」

「はい……一番の習慣は、毎日決まった時間に鳴くことです」

「その時間は？」

「15時10分。回数は2回です」

「ほう、正確ですねえ。コロナさんからは気品と気高さを感じます」

「その時間に近隣のオフィスからチャイムが聴こえていて、休憩時間の終了なのでしょう。コロナがそれに反応しているうちに習慣になったようです」

「都合が良いわ、その時間まであと1分少々ね。ベルお願い」

「ほんと、ベルが頼りね。見ててねミスターラブキャット、ベルが今からスゴいことするから。でもいつちばんスゴいのは、あちらのお人形さん……じゃなくてマスターなんだけどね」

あの老人は店長だったのか。確かに只者ではなさそうだ。

「あたしがカウントする、15時9分50秒、51、52……」

「おいキーさんや、あんたは蕎麦を何杯食べたんだい？」

「余計なことしないのベル！ 57、58、59……10分」

15時10分の前後5秒間、ベルは目を閉じ気持ちを集中するよくな仕草をした。そうする理由は知らないが、広尾は今までにないベルの一面を意外に思い、そして感心した。

「……聞こえた、ニヤンちゃんの鳴き声！」

「え？ 僕には何も」

「これがベルの能力。ベルは遠くの音を聞き取ることができるんですよ」

「あーん、でも聞えた鳴き声はね……4匹分なの。しかもバラバラの場所から」

「意地悪な偶然ね。でも、3匹には絞れるわね」

「キーさんの言う通りです。なぜなら1匹は私だからです」

「もうノブったら、紛らわしいことして」

「あノブ美味しい、ズルい！ ベルも鳴けばよかった。ニヤーン、ニヤーン」

「聞く側が鳴いても意味ないでしょ」

「いやいや、ベルさんの時そばネタも見事でしたよ」

「そうだそうだ、1匹は鈴の音も聞こえた。ステキ男子さん、ニヤンちゃんに鈴は？」

「いえ、付いていません」

「じゃ2匹に絞られたつと。場所は第2倉庫と、廃屋脇の路地よ。

どっちかは赤の他猫ね、世間では赤い人や猫の方が貴重だけどねえ」

「ではキーさん、手分けして2箇所に行きましようか？」

「待ってノブ、先に全員で廃屋の方へ。急いだ方がいいわ、ちよつとあの場所、嫌な予感がするのよね」

キーの言葉を合図に、ベルとノブが店外へ駆け出す。2秒ほど遅れて広尾も慌てて外に駆け出す。最後に残ったキーは

「マスター、留守をお願いします。1時間後に戻るから」

「では冷えたダージリンティーを用意しておきましょう」

本日2度目に発した店長の声色は、1度目と全く同じであった。

cafe アンタツチドアを出て5分近く走ったであろうか、小さな民家の脇にある目立たない路地を指して、キーは言った

「ここよ広尾さん！ この角」

どうやらこの民家が廃屋のようだ。路地の正門に当たる電柱には中身の入ったゴミ袋が置かれている、路地の奥にもゴミが置かれているだろう。

ノブが一番乗りで路地に突入する、案の定多量のゴミ袋が置かれており、それを避けながら走る。ゴミを避けるのにも華麗さを忘れない。

「さあコロナさん！ お待たせしました、ヒーローの登場ですよ」
台詞の前にゴミに躓いてしまい転びそうになったが、咄嗟のターンにより事無きを得た。それにより華麗さが4割アップ、怪我の功名とノブは思った。

ノブの視線の先である路地の奥は行き止まりになっており、突き当りに灰色のシャルトリューが寝転んでいる、コロナだろうか？

その次に広尾が到着し、猫を認識すると

「コロナ！」

正解だったようだ。コロナは広尾に気づき顔をあげる。

直後にキーが到着。コロナに駆け寄る広尾を制止する。

「広尾さん、それ以上進んではダメ！ 危険なの」

なぜ危険かはわからないが、そういえばコロナの身体が大きい。

広尾が毎日見ていたコロナより165%増しといったところか。よく見ると、コロナ周囲のゴミ袋や電柱も他のそれより大きい。

「ヒロイン、ベルも登じょブギュモガー！」

最後にベルが騒々しく到着、ポリバケツに躓き豪快に転んだ後は

「バフツ！ 登場バフツ！ ゴミ袋！」

ゴミ袋に顔を埋めること2回。

「あーん灰色お、ぜつたいミケだと思ったのにい」ベルは何の賭けをしていたのだろうか。

「ここ、やっぱり！ 広尾さん、この先は空間が歪んでるの」

キーの言う「嫌な予感」とはこの事であったのだ。尤もキーは予感ではなく知識でこの場の危険性を察知したのだが。

「強力な磁場が発生してるせいね。コロナちゃんから見たベルは不細工に見えてるのかなあ？」

ベルには悪いがキーは突っ込まずに説明を続ける。

「広尾さんもコロナも境界に触れないでくださいね、消滅しちゃうの。ここの場所、揺らぎが激しいから、運が悪いと空間が閉じちゃうんだけど、まだ残ってた、ギリギリセーフ」

しかし広尾は気が気ではない。

「そうなの、でも1つだけ弱点があるのよう
それは？」

「ベルのセーターとスカートが静電気だらけになることよ。あーん
歩きにくい!」
なるほど。

「お帰りなさいませ」

いつも通りの声といつも通りの表情で店長が一行を出迎える。広
尾が抱いているコロナを見ても動じていない、彼らが依頼をこなす
のが当然だと言わんばかりである。

「じゃ、お祝いね。フランボワーズのケーキ、副題は『情熱の……』
そこにキーがダージリンティーを運んできたので、ベルも併せて
皆にケーキを振舞うことにした。

「あ、そういえば」

ケーキの配置が終わると同時にベルが話を切り出した。

「ねえねえニヤンコのパートナー様、どうして空間の歪みが危険か
わかるかな？」

ベルの表情はいつも通りだが言葉には覚悟という方向への意思ベ
クトルが存在する。

「空間の歪みは……断裂でなければ、生物は通り抜けられるので
よ」ノブがベルの意思を察し説明を続ける。

「ええと……ということは別段歪みを中和する必要はなかったの
ではないでしょうか……?」

怪訝そうに言う広尾に、キーが2秒弱ほどためらってから答えた。
それが自分の役目だと感じたのだろう。

「あなた達はね……霊体なの。コロナも、あなたも、もう死んでし
まってるのよ」

広尾は驚かなかつた。いやむしろ、覚悟した表情を見せ、反応した。キーの間よりも若干長く、話し始めまで3秒弱を要した。

「そうでしたか。僕も少々の違和感を感じていました。驚いたというか、胸の痞えが取れた気分です」

「あーらあら、やっぱり気付いてなかつたのね。でも事故や事件に巻き込まれた自覚はある感じねえ」

「少しでも心当たりがあれば、あたしが念視できますよ」

キーは優しい働き者だ。

「いえ、もう終わったことです。いましばらくこの土地でコロナと暮らせればそれで不満はありません」

「気が向いて霊界に行くときは、いずれ行くベルのためにハーレムを用意しておいてね」

しばらくの談笑の後、広尾はコロナを抱き、cafe アンタツチドアを出た。キー、ベル、ノブの笑顔と、入店時と変わらない店長の落ち着いた表情に見送られて。

カフェを出て20歩進んだ後、思わず右上と左上を見てしまった。自身の胸元を確認する、コロナは確かにここにいる。コロナを確かに抱きしめている。

広尾大樹は声を出して笑った。

第2話 代価と炎、抗う覚悟（前書き）

私共のサイト用に、半年ほど前に執筆した作品です（サイトでは第3話になっています）

仲間への信頼と、チームプレイをテーマに執筆してみました。

第2話 代価と炎、抗う覚悟

ここはカフェである。小腹の空いた者たちが集う16時のカフェである。だがここで、ノブの口から発された料理が美味しいのか不美味しいのか、それを想像・検討した者は誰もいなかった。

「こんぺいとう醤油フライが、ですか？」

ある種グルメな聞き間違いを犯したバーテンダーのノブに、対面する3名が次々と言葉を返す。無論、料理の想像ではない。

「『コンペンセーション・フレイヤ』よ、いま食べ物の話なんてしてないでしょ！」と言ったのは、ウェイトレスのキー。

「悔しい！ ノブ美味しい！ ベルもボケたい！」と悔しがったのは、パティシエのベル。

「はい、通称『炎熱魔』。魔界の炎を纏った精霊のことです」
最後に返したのは、cafeアンタツチドアの常連客、森川洋太である。

キーとベルが驚き、ノブが美味しくトボけたのは、森川洋太がコンペンセーション・フレイヤに遭遇したと言ったからだ。

「すぐくレアよう！ 炎熱魔見たなんて。サインは？ サインはもらった？」

炎熱魔のサインはベルでなくても見たいであろうが、

「重要なのはサインじゃなくて、見たということはつまり、契約したということかしら」

キーは生真面目にベルに挑みつつ会話を構成していく。

「契約したのは聖奈、恋人です。だから僕は、どうしても……」

「美しいベル様の奴隷になりたくて……」

言葉を奪われて困惑した顔の洋太と対照的に、満足気な顔のベル。

15時25分に森川洋太はcafeアンタツチドアにやって来た。

普段は木曜に来店するのだが、今日は水曜であり、キー、ベル、ノブは珍しいと思った。さらに珍しいのは、洋太の好物である、ベル作の「ブルーベリーとレアチーズのムース」をすぐに手を付けなかったこと。そして極めつけは、普段大らかに微笑んでいる洋太が、木製のカウンターに鎮座する、ベル渾身の作品を見つめたまま難しい顔をしていたことだ。気になったキーが尋ねたところ、コンペンセーション・フレイヤという単語が登場した、という経緯である。

「美しいベル様少々よろしいですか？ 情報の外に放られている私の為に、その珍精霊の説明を切望します。私は千のカクテルと万の男性を知っています、その醤油フライを存じておりませんので」
カウンターの内側から依頼するノブに、ベルは大きく頷く。

「わかったわ、ここはノブの為にサービスしちゃうわよ。じゃキー、説明お願いね」

「説明を振られるのは想定内よ。いいノブ、炎熱魔はね」振ったベルを見ることがなくキーは説明を始めた。

コンペンセーション・フレイヤは炎の精霊。精霊だが魔界の炎を纏っており、また通称に「魔」が付いていることからわかるように、気質は残虐で悪徳。高位の召喚師による召喚か、深い悩みを持った人間の思念を媒介にして実界に現れ、最大で5つの願い事を聞く。その願いを叶える代償として、炎熱魔は1つめの願いを叶えたとき、契約者の右腕を焼き尽くす。2つめの願いの代償は左腕、次に右脚、左脚、最後は頭部。

願いを叶えるのは契約から2日後。返答を聞きくために契約した場所に現れる。炎熱魔の「代価を払うのは誰か」の問いに「望むなら私の五体を捧ぐ」と返答した者が焼かれる運命となる。5つの願いを望むことは、当然自らの死を招くことになるため、ほとんどの契約者は1つから4つまでの願いを提示する。しかし3、4つの願いであっても、多くの者はショックで絶命する。

「なるほど。キーさん、ありがとうございます。その炎熱魔と恋人の聖奈さんが契約したと」

話の腰を折った侘びとばかりに、ノブが洋太に話を振る。

「浮気よ浮気！ 森ボーイというダーリンがいながら、ワルに憧れちゃって！」

話の腰を折るベル。

「契約が浮気ならレンタルDVDショップに入会もできないわね。聖奈さんはなぜ契約を？」

折れた話を丁寧に治療するキー。

洋太の恋人、聖奈の両親は都内に小さな工場を経営していたが、借金を抱えたまま倒産、そのまま蒸発した。その支払いを聖奈が背負っているのだという。悩んでいる聖奈の前にコンペンセーション・フレイヤが現れ、負債の返済を目的に契約した。

「そのとき僕もいたのですが、恐怖で何もできなかった。だから僕は聖奈の身代わりになるつもりです、時間は今日の17時」

今日、洋太がcafeアンタツチドアを訪れたのは、腕を失う前に、自らの手でベル作の甘味を食するためだった。右腕にとっては最後の晩餐である。

「聖奈、セナさんですか。とても神々しい名前ですね。肌は陶器のように白く、栗色のロングヘア、でしょうか？」美しい女性、または男性を想像するノブは常に楽しそうである。

「だからって、森川さんが犠牲になることはないでしょう」

洋太のグラスに水を注ぎながら、話のテーマを現実に還すキー。生真面目な彼女は常にこの作業に忙しい。

「いえ、これしか方法はないんです、これしか」

キーは洋太が見せた借用書に触れ、自身の能力であるサイコメトリーを使用した。キーが見たのは、聖奈に内緒で夜逃げの準備を進める両親である、洋太の話に嘘はない。

「さてさて、常連様のピンチですよ、キーさん」
ノブは微笑みながら言う。

「名は心を映す！森ボーイの広い心に乾杯ね」
ベルはワクワクしながら言う。

両者の言葉を聞くまでもない、という顔で洋太を見つめていたキーは、彼の鼻先に向けて右腕を伸ばす。人差し指が親指とL字型を形成している。洋太は責められると思いき身構えるが、その後キーは微笑み、突き出した腕を90度右に捻り

「lock the request in solid-doo
r！」

状況を把握できない洋太は身構えたままだ。

「フフフ……アイアイサーです」
微笑むノブと

「アイ！ アイ！ アイアイサーよう！」
喜ぶベル。

「あの……どういうことでしょう……」
置いてかれる洋太を見つめてキーは言う。

「あたし達が何とかする、あなた達を炎熱魔の犠牲にしませんからね」

「まーかせて、ベルたちに不可能はないんだから　じゃ行きましょ、そろそろ時間でしょ」

そう言いながらベルは洋太の背中を押す。他の者も店を出る支度始める。その様子をマスターが、動くことなく見つめている。カウンター奥の柱と平行に直立している彼は、柱と同じ時期に、同じ業者に仕入れられたかのように同調している。歩みを止め、マスターを数秒見つめたキーは、表情が読み取れない老紳士に言った。

「大丈夫よマスター！。全員……全員笑顔で帰ってきます」

マスターは何も言わない。キーが柱に言ったと勘違いをしているかもしれない。

時間は16時22分。マスターと、ムースが乗っていた濃紺色の皿を残し、彼らは戦地へ向かった。

16時50分、キー、ベル、ノブと森川洋太はコンペンセーション・フレイヤと契約した公園に到着した。公園に人気は無く、薄暗い街灯がジャングルジムを弱々しく照らしている。

「聖奈には来ないように伝えました、危険が及ばないように」洋太は皆に話した。

「森川さんもいらっしやなくてよかったですよ、危険なのですから」とノブ。

「そももいきません、私が蒔いた種ですから」恋人の蒔いた種、と言わないのが洋太の聖奈への心遣いである。

17時ちょうど、空気の振動が徐々に活発になっていくのを感じる。「逢魔が刻とはまた粹ですね、そろそろご登場ですか」余裕のノブ。

5秒ほど経過し、公園内の北西に佇む物置小屋、その4mほど手前から間欠泉のように火柱が上がる。

炎はアメーバの粘性を持つかのように徐々に人型を形成していき、ノブの倍ほどの身長に進化したところで安定する。真紅の身体に時々黒紫の部位が見え、その汚れた熱が枯れ木を焼くかのように鋭利な音を立てる、これが魔界の炎か。

「炎熱魔、初めて見るわぁ！ デジカメ持って来ればよかった」ベルもまだ余裕のようだ。

その隣で唯一余裕がない洋太が、炎と緊張で顔に汗玉を生産している。左右の外側にキーとノブ、横一列で対峙する4人の意識に言葉が割り込んでくる。

「代価を払うのは誰か」

洋太がc a f eアンタツチドアを訪問するまでは、彼が返答する予定であった。しかしキー、ベル、ノブの優しい妨害により、洋太は答えることを許されない。もつとも今は、恐怖と緊張で脳内が満席のようだ。3名が彼と恋人を救うと言ったこと、あるいは自身がここにいることすら頭から消えているかもしれない。

「代価を払うのは誰か」

もう一度炎熱魔が4人の意識に割り込みを入れる。すると洋太を遮るようにキーが踊りだし、凜と炎を見つめる、ベルとノブはキーを瞬きせずに見つめる。

「代価を払うのは誰か」

3度目の問い、その問いにキーは返す。

「望むなら、あたしのごた……」

ノブはキーの右腕を押さえた。「五体」と言おうとしたキーの「た」「い」のちょうど間、1対1の中間地点であった。そしてベル

は、キーの口を塞ぎ、さらにキーの胸を揉んでいる。表情はこの上なく真剣だ。

キーを押さえたのは、両者のどちらが先というわけではない、写真判定をしても同着だろう。

「やれやれ、危ない危ない。作戦不在のキーさんですねえ。まったく、こんなことだと思いましたよ」

呆れ顔でノブが言う。

「ホントよもう！ ああ危ない子！ 危ないウエイトレス！ 胸ないウエイトレス！」

ベルはまだキーの胸を揉み続けている。

「ふふえふおふおふあふあひふええええ（胸を揉まないでえええ）」
気を削いだことで、キーがもう契約に応じないと判断したのか、ベルは口の拘束を解いた。胸はまだ揉んでいる。

「炎熱魔の撃退は不可能よおおおお！ 他に方法があるのおおおおお！」

恥ずかしそうに叫ぶキーに、ノブは諭すように

「よいですかキーさん。生贄の代替なんて、手段はワーストですよ。『あたしが犠牲になれば解決する』とお思いですか？ 優しい人間ほど犠牲になる・不幸になる。そんな理不尽な現代のシステムに、キーさん自身を組み込むのはお止めなさい、そうならないために私達がいるのですから」

そう言うとノブはキーの腕を解き、ベルももう飽きたのかキーを完全に開放する。

すっかり意気消沈し座り込むキー。それとは対照的な、いや普段からキーと対照的なベルが炎熱魔に向かい、正確にはその背後の物置小屋に向かい、叫んだ。

「ベルにはわかるわよ、出てきなさい！ 炎熱魔が降臨するとき、呪文を詠唱する声が聞こえたわ。あなたが黒幕の召喚師よねっ！」

数秒した後、ベルにだけ聞こえる「チッ」という舌打ちをBGM

にし、物置の陰から黒幕が姿を現した。炎熱魔を使役するほどの召喚師でも、ベルの聴力は誤算だったと見える。しかしそれ以上に誤算を感じたのは洋太である、その姿を見た洋太の汗がさらに増える。

「あ……………聖奈」

4人の前に立っているのは、白い肌に美しいほどに不機嫌な表情を乗せた女性である。

「あーあ、余計なこととしてさあ。まあいいか、はい腕、腕を出して栗色のロングヘアをなびかせて、面倒臭そうに言う女性に向かい、言葉を失った洋太の代弁をするベル。

「あらあらこれは、魔界魔界詐欺ね。この人が森ボーイの恋人なの？ 目的は何なのよ」

召喚師はやはり面倒臭さそうに答える。

「金よ金、金が欲しいの。今は強い者が欲しい物を得る世の中なんだからさ、私は彼の命を貰っているの」

「それは法が許しません」割って入るノブ。

「私は法より強いもん」インタビュ慣れしている俳優のように平然と言つてのける聖奈。

「法を超越したと豪語する割に、システムの一環でしかない金が大事ですか。ではキーさんベルさん、ここは戦闘担当の私にお任せを」もちろんキーもベルも、ノブが戦闘担当と認識してはいない。ノブ自身も今しがた、キーの『生贄担当』を否定したばかりであり、担当という制度に同意しているわけではない。なぜか？ 彼らが身を投じるミッション、闘いは多種多様であるため、担当を固定せず各々が状況や命題に応じ最適な役割を演じるべき、と考えているからだ。ベルの能力が有効ならば前線に立つこともある。従って固定観念としての「戦闘担当」は彼らの間では誤った認識なのである。従ってノブの台詞は

・キーを後方に下がらせ、心をクールダウンする猶予を与える。

- ・同時に勝利へ向けた状況分析と戦法の指示を任せる。
- ・そのための時間稼ぎと、分析要素の提供をノブが行う。

の3点を提案した意図があるのだ。

その思考と意気をキーは察していたので、何も言わずに下がり、戦術面でノブをサポートすることにした。犠牲となる覚悟からベストを模索する覚悟へスイッチを切り替えたのだ。

「やれやれ、人間は外見、内面、言葉遣い、全て揃ってこそ魅力的なですけどね。あなたは外見だけ、1/3ですね。それと、名前負けしてます」本音を交えて挑発するノブ。

「人間ってどうか、損得で動くだけの動物なんじゃない？」挑発に油を注ぐベル。

すると気だるい様子だった聖奈の表情が変わる。

「黙れお前ら！ 殺すぞ！」

それは洋太が初めて聞く彼女の言葉だ。

「それでは、1回の表から飛ばしていきますよ」

その例え通りにノブは炎熱魔に向かい腕をスローイングする。

「初耳と思いますが、私の能力は電撃です。ライトニングアローツ！」

ノブの指先が轟音と光を生み出し、その光は瞬時に炎熱魔の顔面に結ばれた。しかし炎熱魔は事象すら気付いてないとばかりに平然として、炎を揺るがせている。

「まあ、技の名を言わなくても電撃は出せるんですけどね。しかし効果なしですか、炎と電撃は悪くない相性なのですが」

そう言いながらノブは第2球を投じる、が炎熱魔に変化は現れず、炎が揺らぐのみである。

「ハイパーライトニングアローでも効果なしですか。それでは次はハイパーハイパーハイパーライトニング……」

台詞が終わる間もなく、炎熱魔の胸部から拳大の火球が飛び出す。ノブは顔面を捉えた火球を身を仰け反らして避ける。

「つとと、まだ1回の表は終わってませんよ」

上空の夕焼けを見ながらノブは言う。しかし野球を知らない炎熱魔は再び火球を発射する、今度は3発。

「3球！ ボークボーク！」

これもかわすが、先ほどより余裕がない。

「実体が炎では直接攻撃は効果なし、ならばこれは如何でしょうか」
再びノブの電撃、瞬時に炎熱魔の腹部に達するがそのまま通り抜ける。そして電撃は、背後にいる術者の聖奈を捕らえた。

「ご安心を、パワーは抑えてありますから。術者の意識が途絶えたらどうなりますか？」

しかし電撃を浴びた聖奈は意に介さず、ノブを見下し「ハン」と一蹴する。どんなに巨躯な男性でも気を失う強度の電撃であったはずだが。

不思議に思うノブに対し、聖奈は陶器のように白い手の甲を披露する。その指先には指輪、に付いているアーモンド状の石は時間を空けずに、絶えず色が変化している。キーはその石がもたらす不益を知っていた。

「以前、四大元素の効力を無効にする石の話聞いたことあるの。それは色が絶えず変化しているという石。これのこと？ ノブ、あの人に電撃は効かない！」

「知ってる人がいたんだ。そう、今回の獲物はね、お金と素敵なゆび・わ」

洋太は失望したであろう。しかし彼は既に放心状態であり、状況に変化は見られない。直後、火球がノブを襲う。今回もかわすこと

はできたがノブの体力は有限だ、いつまで耐えられるだろうか。

「これはなかなかどうして、人生5指に入るピンチではないでしょうか。どこかにホーリー属性の魔法使いが住んでるマンションはありませんか？」

言葉とは裏腹に、ノブの表情から余裕は消えている。今までより少し、息が荒い。

ノブが炎熱魔と対峙している間、キーは30mほど後方の銀杏の樹を盾に戦況を伺っている。闘いの状況から撃退のヒントを模索しているのだ。

「厳しい闘い……でもベストを探すのよね、ノブ！」

キーが思考の中で立案と却下を繰り返している間、ベルはキーから15mほど離れた、象に似た遊具の背後にいた。集中している様子が伺える、攻略の糸口になる「音」を聴こうと、ベルも自身の能力でベストを模索している。ベルの隣にいる洋太はどこことなく前方を、焦点を合わせずに見ている。まだ事実を受け入れられないようだ。彼はノブの電撃を初めて見たであろうが、それすら意識の外であるようだ。

火球をかわし続けるノブが肩で息をするようになった頃、ベルの中にキーの声が入り込んできた。

「ベル……聞いて、作戦を伝えます……」

それから2分ほど後、炎熱魔と聖奈の前にベルが飛び出してきた。

「さあ、主役の登場よ！ベルの前では炎熱魔もブルブルよ。炎なのね、炎なのね！さあ観念しなさい」

その後ベルは、隣にいるノブに小声で何かを囁き、再び炎に正対する。手には木製の、正確には木枝を加工した物体を持っていて、それを頭上に掲げた。

「ベルが使えるのは恋の魔法だけ、その魔法じゃ無理。だから今日はこちらよ！これは精霊を浄化する『ロキエの樹』で作った十字架、

これに触れたらアンタみたいな炎は、瞬時に消滅よ！」

炎熱魔は微動だにしない、しかし煩わしく思ったのか、火球をベルに向けて放つ。

「ベルのアスリートの身体能力をナメちゃダメよ。見よ、この絶妙なコントロールを」

火球をかわし、ベルは十字架を炎熱魔に向けて放る。

「とう！とう！とう！とう！とう！ 2回目以降の『とう！』はエコーよ」

十字架はベルの絶妙なコントロールの肩書きに恥じるかのように、炎熱魔の頭上を、聖奈の頭上を越えていく。

「あらら！あらら！あらら！あらら！ これもエコーよ」

「本当に、絶妙なコントロールですねえ」

最初から当てにしていなと言わんばかりに、直後ノブは電撃を乱発する。しかし相変わらず効果はない。

「そろそろ飽きた、つまんない。消えてよ」

召喚師の言葉をトリガに、炎熱魔は移動を始めた。脚に該当する部位を前後することなく移動する様子は、堂々としていて威圧感がある。

しかし移動は、ノブとベルではなく、聖奈に向かっていた。炎熱魔が後退していく、合体でもするのだろうか？ しかしついには聖奈を通り抜け、彼女の後方にある魔法陣の中央に達した。そこから火柱が立ち昇る、パワーアップだろうか？ 変身だろうか？

そして数秒後、火柱と炎熱魔は消滅した。

「え？」

聖奈は呆然として無垢な表情を見せた。その表情からは凶悪な召喚師であることが想像できないが、先程まで人を焼こうとしていた張本人である。消滅はどうやら意図した制御ではないようだ、彼女は状況を整理できていない。そのときキーが聖奈の眼前に現れて話し出した。

「炎熱魔を召喚する魔法陣の図形はね、門が3つ」

聖奈の耳に届いているかは定かではない、しかしキーは説明を続ける。

「魔法陣は中央と前後に合計3つの門を描くという構成。召喚時は前部の門に×印を描き、帰還時には後部の門に×印を描くわよね。そして、中央の門に×印を描いたら……」

キーの説明にベルが割って入る

「さーてさて、魔法陣を見てちょんまげ。ホントにベルは絶妙なコントロールでしょ」

魔法陣の中央には、ベルがかつて持っていた「元・十字架」が落ちてている

ノブの電撃で黒焦げになったそれは、中央の門に×印を描いていた。「中央の門に×印を描いたら、それは契約の破棄。術者は2度と炎熱魔を召喚することはできない、そういうことなの。ちなみに『口キエの樹』の十字架なんてものは存在しないから。それはご存知だったかもしれないけど、胡散臭く思える情報の方が、今回は効果があるでしょうから」

説明が終わると、キーは次の仕事に取り掛かろうとする。眼前の加害者に平手打ちをしようと右手を、ベルとノブの功績で失うことを逃れた右手を振り上げた。しかし些細な痛みは、洋太の想いの代償にはならない。平手を打たずに腕をゆっくりと下ろし、代わりに彼女の身体に触れ能力を使用した。

キーには見えた。聖奈を置いて逃げようとする両親が、娘の召喚した炎熱魔により焼かれる様子がある。母親は両腕と右脚、父親は両腕を焼かれたときに息絶えた。娘は父親の亡骸に向かい、母親よりも代価が安いとは何事かと叱責している。その後数多の男が右腕を焼かれるシーンが次々と映し出され、やがて映像が途切れた。

直後、キーは脱力して座り込んだ、今まで気を張っていたのだろ

う。聖奈は状況を把握したようだが、まだ動かない。公園に脱力が
どんどん伝染していく。

「あとは警察の仕事、さあ戻りましょう」

そう言っつてノブはキーを抱えた。ベルは洋太を起そうとするが、
自力で立ち上がった、少しは自我を取り戻したようだ。洋太は名残
惜しそくに聖奈を見ていたが、声をかけずノブ、ベルと共に歩みを
進めた。

独り若い女性と、自身が描いた魔法陣が残された公園に、パトカー
のサイレン音が近付いてきた。

「私はもう、女性に騙されません。ベル様最高です。ベルサマサイ
コウデース」

「ホラホラ、キーも言っつて。森ボーイもこうして反省してるのだか
ら」

「何で私まで言わされるのよ。嫌よ、『ベル様最高』なんて」
「どうやらc a f eアンタッチドアにてベル主催の反省会が催され
ているようだ。」

「あのさ、どうしてわかったの？ あたしが炎熱魔に右腕を捧げよ
うとしてるっつて」

反省会のテーマー、キーは抱いていた疑問を恩人たちに投げかけ
る。

テーマーの講師はノブ先生である。

「それはですね……マスターです。ここを出るときに、キーさんは
マスターに声をかけたでしょう。大丈夫って念を押してましたよね、
それで私たちはキーさんが不安を抱いていることを察したのですよ。
あれはキーさん自身に言い聞かせていたのでしょうか」

ベル副講師も講義したかったようで、

「そうよそうよ。マスターはベルとノブが止めるって信じてたから、不安になんて思ってたのにな」

皆はマスターを見たが、見られた側のマスターは相変わらず柱と平行を保ったまま黙っている。実はマスターは柱なのかもしれない。キーはノブとベルの察しの良さに感心をしたが、それ以上に自身の浅はかさを反省した。

「そっか、そうね……ああ、あたしのバカ。ベル様ノブ様最高です」
キーは溜息のような言葉を残し、賄い料理を作るために奥の厨房へ向かう。

勿論皆はキーの功績で炎熱魔を撃退できたことを認識している。だがキーの謙虚な反省は彼女自身の成長と、結束の強化を生み出すため、周囲は愛情と敬意と意地の悪さを持って彼女を突き放すのだ。その自覚無き当事者のキーは、厨房の流しにて水を勢いよく出し、葉の付いた赤蕪の束を抱えたまま佇んでいた。するとカウンターから談笑する声が聞こえたので、振り返った後、呟いた。

「……………ありがとう」

その直後、ベルの大声が響く。

「どづいたしまして！ キーちゃま」

厨房からは勢いよく出る水の音と、キーの恥ずかしそうな叫び声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867v/>

cafeアンタッチドア

2011年10月9日13時46分発行